慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	人生の意義及び価値（第一回）
Sub Title	ルードルフ、オイケン教授の新人生観
Author	川合, 貞一
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.2, No.2 (1909. 9) ,p.123(1)- 136(14)
JaLC DOI	10.14991/001.19090901-0001
Abstract	
Notes	論説 巻頭の巻号(誤植) : 1巻7号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090901-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

原稿ハ凡テ左ニ宛テ御送附被下度候
市内麻布區狸穴町四十一番地
星野勉三
事務上ノ一切ハ
市内芝區三田二丁目慶應義塾内
三田學會
ニ宛テ御送附被下度候
雜誌ノ御注文ハ凡テ發賣所ヘ宛テ御申込被下度候
原稿ノ〆切期日ハ毎月十日トス
定價 一冊金貳拾錢 郵税金貳錢
十二冊金貳圓四拾錢 郵税共
郵券代用一割増

明治四十二年八月二十六日印刷
同 四十二年九月一日發行
發行兼編輯人 東京市麻布區新堀町七番地 神戸彌作
印刷人 東京市京橋區宗十郎町十五番地 中島丑之助
印刷所 東京市京橋區宗十郎町十五番地 合資會社 東京國文社
發行所 東京市芝區三田慶應義塾内 三田學會
發賣所 東京京橋區築地二丁目 振替貯金東京二四一七 籾山書店
取次店 東京堂、有斐閣、上田屋、至誠堂、北隆館、東海堂、良明堂、(京都)東枝、寶文館、(大阪)盛文館、杉本、(九州)菊竹、(臺灣)新堂高、(清國)濱井

三田學會雜誌 第一卷第七號

論説

人生の意義及び價値（第一回） 川合貞一

（ルードルフ、オイケン教授の新人生觀）

謂ふ迄もなく懷疑は近代人の特質である吾人は最早傳來の人生觀に安住することが出來なくなつたそこで人生なるものがなんだか空虛な徒爾なもののやうに感ぜらるゝに至つた此の一見空虛な徒爾な人生其物に理想的内容を與へようと云ふのがオイケン教授多年來の努力である教授の新人世觀が果して近代人を滿足せしむるに足るや否やは別問題であるが兎に角健氣（ヒロイツシエ）な行爲であると云はなければならぬされば教援が今年のノーベル文學賞を獲たのも決して偶然ではない

1 オイケン教授は一千八百四十六年の生れでゲッチンゲン大學に學び一千八百六

十七年より七十一年迄伯林に在つて中學教師となりそれより哲學正教授として
バーゼル大學に聘せられ七十四年エナ大學に移り今日に至るまで學生の薫陶新
人生觀の鼓吹に努めて居る著す所少なからず其の中主なるものは

Geistige Strömungen der Gegenwart, 1878, 3.Aufl. 1904.
Prolegomena zu Forschungen über die Einheit des Geisteslebens in Bewusstsein uud That der Menschheit, 1885.
Die Einheit des Geisteslebens in Bewusstsam und That der Menschheit, 1888.
Die Lebensanschauungen der grossen Denker, 1890,5. Aufl. 1905.
Der Kampf um einen geistigen Lebensinhalt, 1896.
Der Warsheitsgehalt der Religion. 1901,2.Aufl. 1905.
Grundlinien einer neuen Lebensanschauung. 1907

である

教授は著しくフヒテの影響を受けた人で深遠にして抽象的時には解し易からざる所ある思想家と謂はれて居る吾人は是れより進んで渠が人生觀の如何なるものなるかを檢討せようと思ふのである

『1』

新しい人生觀を覓めると云ふ半面には在來の人生觀では最早吾人を滿足せしめないと云ふ確信の存することは明かであるされば此の確信を證明する必要があるのであるが之を證明するに方つては唯單に在來の人生觀を否定する丈けに止まらずして是に由つて現代の狀態を知り新人生觀の覓めらるべき方向の支點を得たいと思ふのであるいづれにせよ正解に達する第一の條件は問題の位置を精確にするにある在のであるから玆には在來の人生觀を叙述し批評して新人世觀を述べる素地とせよう

現代を一瞥した所では混沌たる狀態を呈して居るやうであるが仔細に之を點檢すると其の間に幾多の生活の形の存することを發見することが出來る是れには五つあると云へる卽ち一方に於いては基督教及び內存的理想主義のそれと他方に於いては自然主義社會主義及び藝術家的主觀主義の生活の形とである

一　基督教の人生觀

基督教の人生觀はずつと古から大した力のあつたもので全生活の精神であり支配者であつたのである而して今もなほ其の影響の絶えざるものがある要するに基督教は世界史的生活の最大力であつたと云つて良い所が近代に至つて基督教に向つて反對運動が起つて來て其の勢が益々募りつゝある而して一見全く確乎たるらしく思はれる處に於いても其の地盤を覆さうとしつゝある素より個人の反對はいづれの世でも絶えたことはなかつたのであるが然かし精神的内容の缺けて居たが爲めに一つに結び付くることが出來なかつたのである所が十七世紀の始以來新しい考へ新しい生活の流れが起つて來て事態全く一變するに至つた而かも其の運動が唯教化の先頭に立つて居る人々に限られて居た間は大した結果を生せなかつたのであるがそれが十九世紀となつては多數民衆に觸るゝに至つたのであるから容易ならぬ事となつたのである

十九世紀に入つて勝ち誇れる新自然科學が基督教の古い世界觀を打ち壞すに至つたことは著しい事實である科學進歩の結果自然竝に人間の歴史が非常に廣汎となつたばかりでなく其れと同時に法則と秩序とを得るやうになり最早超自然

力の直接の關渉を要しないこととなつたものである是れ迄はすべてのものの中心であり世界命數（ヴェルトダシング）の主なる舞臺であつた所の地球が極めて低い地位に下り特別創造になれると考へられた人間も自然と斷つべからざる鏈鎖によつて結び付けらるゝこととなり共同の法則の中に入ることとなつたかくて世人の考へ方と云ふものが全く變つて何事によらず徹頭徹尾（ドコマデモ）批判的に因果的に考へるやうになつて來た其の結果としてあらゆる史的傳説に疑を挿みオーソリチーを信せず從つて基督教の説く所も原始民族が世界に下した子供らしき夢のやうな説明に過ぎぬほんのアントロポモフイスムスだと考へるやうになるのも自然の事である現に實證哲學ではさう教へてゐる而して其の影響たるや遠く學派以外に及んでゐるのである

只考へ方の變つたと云ふばかりでなく全生活が其れが爲めに一變するに至つたのは注意すべき事である今日では精神生活の各方面とも――科學も藝術も國家も經濟も宗教の支配を離れて了ひ新生活なるものが無限に擴大せられ現實の全内容を包含することとなつて最早他の何物の助をも借るを要しないやうに考

へらるゝに至つた基督教は此の新生活の中に地歩を占めなければならぬのであるが何にしても近代の生活と基督教とは全然相反して居るのであるから是れが頗る難事である一體基督教は其の始俗世界に對して新世界を建設しようとしたのであるが近代になつては當時侮蔑した世界が益々牽引力を有するやうになりそれと同時に基督教が重きを置いた純粹内界（ライネインネンヴエルト）なるものに對する理解が消え失せて了つて人は唯俗世界の事にのみ齷齪たるに至つたかくて基督教と風馬牛な生活の流れが益々力を得て來たのである無論時代の潮流なるものが直ちに眞理であると云ふ譯ではない而してまた駁撃せられ否定せらるゝ中にも基督教が大なる力として存して居ないと云ふのでもないがともかくも社會の狀態が一變したのであるからして其れが爲めに宗教は最早解答にあらずして寧ろ疑問となり人生の意義を保證し直ちに其の肯定に導くには餘りに不確實となつたのである

一　内存的理想主義の人生觀

幾久しく基督教の人生觀の傍に或は之を補ひ或は之に反對した今一つの人生觀が存して居る無論此の人生觀は宗教のそれのやうに確乎たる形を具へ偉大なる力を有して居るものではない而かも人生の如何なる方面にも行き亙つてゐるのである此の人生觀の基督教のそれと一致してゐる點は人生の立脚地を不可見的世界に置く所にある而して其の異なる所は二つの世界を決して引離して了はずして之を唯一なる萬有（アル）の相互に關係せる方面と見る所にあるそれで此の人生觀では人間と萬有とを緊密に結び合はせはするが其れと同時に人間に特別なる地位と任務とを與へるのである一體人間は外的存在としては可見的世界に立つてゐるが靈魂（ゼーレ）に於いては現實の隱れたる深みが其の姿を現じ始めるのである即ち人間に於いて始めて世界の生活が十分な明晰と自由とを得自家活動の發展に由つて全體の地位を進めることが出來ると云ふのであるかゝる人生觀をして一日瞭然たらしめ且つ之に確信の力を添へるものは精神的創造によつて本質上新しい生活が生れ出づることである即ち眞善美の世界が現れ出づることである眞善美に憧憬れ眞善美によつて充實せられたる生活は人間をして大なる世界との内的交通に入らしむるものであつて科學及び藝術上の創造が中心となり人生を充すに至ると全存在をして高尚ならしめ惹いては萬有の運動を促進すると云ふので

8

ある

かゝる人生觀は希臘の文化に其の端を發したものであつて爾來種々の形を取つて現はれ人生に影響を及ぼしだのである然かし內存的理想主義の人生觀が今日に於いて人生を指導しこれに意義を與へるには其の基礎が餘りに不確實となつたのである現實なるものが深みを有し人間は精神的創造によつて大なる世界と內的交通を爲すことが出來ると云ふやうなことは頗る疑ふべきものと考へらるるに至つたのみならず此の人生觀の帶んでゐる貴族的性質に對しても疑が起り反對が起るに至つた現代社會の多數平凡の民衆には精神的創造の企及すべからざるは云はずして明らかである然らばかゝる人生觀の力を失ふも無理からぬ次第と云はざるを得ぬ

一　自然主義の人生觀

近代になつて人生の重心が益々可見的世界に移りつゝあることは論ずる迄もないことである一體自然主義なるものは近代の機械的自然觀から起つて來たものであつて十七世紀の初頭自然の獨立自制を認めたに始まり自然科學の進步發達につれて益々力を得て來たのである

在來の考によると人間世界精神世界は自然に對し別世界を形成つてゐたのであるが近代に至つてこれも決して獨特のものではなくして自然其物の連續に過ぎぬと考へらるゝやうになつたさう云ふ所からして自然主義では精神生活を以つて自然界の附屬物に過ぎずとなし其の獨立を認めないことになつたのである

くて是れ迄獨立して存するものと考へられた內界が陰影の世界となり肉體を通じて血と肉とを得て始めて十分なる現實となることが出來る而して生活なるものは其れ自づからには何物をも有してゐるものではなくして環境との關係よりすべてを受取り環境に縛られてゐるものであると云ふことになつた概念はやがて感官的印象の節略であつて幸福の心核は感官的快感に過ぎぬ而して自然は勢力の並存と解せられ此の勢力が絕えず生存競爭を爲しつゝあつて環境に最も善く順應するものが勝を占めて行くのであると考へらるゝに至つたさう云ふ所から其れ自身に價値を有する抔と云ふものは全く無くなつて了つて生存競爭に役立つものが價値あるものとなつた眞と云ふのも別に萬有の神秘的な本質が理會

されると云ふのではなくして個體をして生存條件に最も善く順應せしめ而して之を維持する所の觀念を指して之を云ひ善と云ふのも經驗世界を超越した所に存するものではなくして生存の維持に役立つ所のものに外ならぬ美も功利の下に組込まれ其の効用によつて己が地位を保つに過ぎぬことゝなつた

かゝる人生觀の波及ずる所其の影響を蒙らざるはなしで科學は全く經驗に基づくべきものとなり思辨的要素は空想として排斥せらるゝに至つた其の結果すべて科學は擴大された自然科學となつて了つた藝術も夢想的な理想を趁ふべきものではなくして現實の世界を如實に描寫するが其の唯一の任務となり社會的生活社會的努力も主として自然力を發展せしめ自然的條件に從ふ方面にのみ向ふこととなつた

自然主義が斯くの如く天下を風靡する勢力を得たからとてそれで以つて最後の眞理が證明されたものと爲すことは出來ぬ見よ自然主義の堅城鐵壁と賴んでゐる自然科學ですら唯感官的印象の模寫ではなくして思惟がこれに根本的の潤色變形を加へて始めて成立するではないかして見ると自然科學も自然主義では說

明が付かないことになつて來るのである要するに自然主義の誤謬は對象や其の形像の爲めにそれを認識し取扱ふ所の思惟と云ふ生活過程を看過してゐる所にある而して自然主義の示す所の生活なるものも自然主義の說明し得るより以上のものを包含してゐるのである人間の生活は唯自然の勢力自然の衝動の爲めに動かされてゐるやうに見えはするが然かしまた精神的勤勞を以つて自然に向ふ時には其の中に跼蹐するものではなくして自然を出でて之を經驗し之を考察する而して自然の富自然の秩序自然の不易悉く其の有となり人間の本質を擴張するやうになる近代の知識上工藝上に於ける自然の征服が生活の成長自家感情の昂進と感せらるゝのは卽ち是れが爲めであるで自然主義なりとて決して主觀を排斥して了ふものではなくして寧ろ其の發展には到る處に之を豫想して居るのであるそこで目ざされた自然主義的文化と云ふものは原始時代の自然狀態とは根本的に變つた狀態となるのであるが自然主義では之を悟らない所からして自家撞着に陷ゐり支ふべからざるに至るのであるで自然主義に取つては全く主觀を排斥して了つて己が基礎を壞り人生觀として瓦解して了ふか若しくは自然以

上のあるものを認めて自然主義以上に出づるか選むべきは此の二途より外にありはしないのである

かう云ふ矛盾が自然主義の全發展に行き亙つてゐる所から其の概念が曖昧模稜となつて來るのであるまづ生存競爭と云ふ基本概念を取つて考へて見てもさうである自然主義の關係から云ふと自然のまゝの存在を維持すると云ふに外ならぬのであるが是れでは文化作業の全般を含むことは出來ぬ況んや其の發展に於いてをやである若しかう云ふ意義の存在の維持が最高目的であるとすれば人類の無限の勤勞歷史の所產悉く何の結果をも生せず人間はもとのまゝで原始時代の野蠻な狀態を脫することは如何にしても出來得ない譯であるすれば生活は之を有すにしても生活の內容は物的存在の外何物をも有しないことになる否生存競爭の劇甚に趣くが爲めに自然のまゝの存在を維持することすら益々困難になつて行くべきである是れ豈に吾人の存在の不斷の退轉ではあるまいか實を云ふと自然主義でも生活に何等かの內容を與へ此の內容が絕えず成長して行き存在をして益々豐富ならしむると考へてゐるのであるが然かし單なる自然から如何

にしてかゝるものが成立し得るであらうか考ふべからざることである自然主義では生存競爭を以つて根本原理と見た所から功利と云ふものが生活の支配力となりあらゆる價値が顚倒せらるゝに至つた然かし此の顚倒たるや詳に考察すると謬れるものであると云ふことが分る成程人間は物的存在を譯もなく維持し得るものではなく之が爲めに不斷の努力を要するが然かし生活と云ふものは全く此の生存競爭に費されて了ふものであらうか功利に注意さへすれば人間社會に特有なるものが出て來るであらうか功利の努力には限界あるとを考ふれば之を疑はざるを得なくなる一體功利の努力と云ふものは個人の幸福と云ふ範圍に限られてゐるもので決してそれ以外其れ自身目的として存するものに及び得るものではないかく云ふと自然主義では現實の生活は紛糾錯綜たるものであるから個人の幸福は其の家族其の鄉土其の國家と分つべからざるもので自づから築えんとするには此等のものにも其の努力を推し及ぼさなければならぬと答へるであらう而かも他を以つて己が幸福の手段と爲すと云ふ內的限界に至つては依然として存してゐるのであるが人生は最早自づからの發展によつてかゝる限界を

脫却しそれ以上に進んでゐる所があるかの殺身爲仁と云ふやうなことは決して功利の爲めの故ではない自然主義では如何に之を理解し評價せやうとするのであるか又一方を見ると勤勞に於いても唯の自我と云ふものが解除されつつある勿論勤勞は生存の維持と密接な關係を有するもので生活に何等か役に立つものでなければならぬのであるが然かし勤勞が其れ自身目的となり功利と云ふやうな念の忘れられて了うに非ずんば大なる事を成し遂げることは出來ぬ而して功利の努力が大なる場所を占めてゐると云はれてゐる近代に於いても其の創造の中心に在つては功利の努力を去ること遠しと云はざるを得ぬのである科學及び藝術に於いて然り政治的及び經濟的生活に於いてもまた然りである

要するに自然主義は排斥すべきものであるさりとて自然に訴ふることの重要なるを忘れてはならぬ可見的自然なるものは吾人の本質のみならず吾人の生活にも非常な關係を有つて來ることとなつた唯自然主義のやうに自然を解すべからざるのみである　（未完）

新文學の辯

馬場孤蝶

新藝術の根據は、大體に於て、既に說明し盡くされ、新藝術の、少くとも傾向を表現せる作品の、見るに足るべきもの、既に世に現はれたること少なからざるに拘はらず、尙、近時の文學は、不健全の文學、墮落の文學なるが故に、排けざるべからずと唱ふる聲の、一部人士の間に聞ゆるは、甚だ遺憾なることなり。思ふに、斯の如き人士は、古き文學、卽ち、吾人と境遇及び思想を異にせる人々が、吾人と境遇及び思想を異にせる人々に訴へんが爲に作りたる文學を標準とし本據として、現代文學を批判せんとするものなるべし。されば、吾人にして、假りにさる人々と同立脚地に身を措き以て、之を考ふる時は、その所說に一應の同情を表するは敢て至難ならずと雖も、さる人々が、文學とは斯の如くならざるべからず、卽ち、文學は、如何なる時代に於ても、必らず前代の文學的思想及び傾向を全然繼承せざるべからずとの見地に立ち